

カントリー・イン・フオカス **ガーナ**

日本とガーナ、これまでとこれから

今年、日本・ガーナ国交樹立50周年にあたる。当初は両国とも順調な経済発展を進めてきたが、ガーナは時代の流れに巻き込まれ悲劇を再度経験する。しかし昨今のガーナの経済成長は著しい。今後、多くの共通点を持つ両国が平和に貢献することを期待する

浅井和子(元駐ガーナ大使)

灼熱の太陽が照りつけ、乾いた赤土の粉塵が舞うガーナの首都アクラの独立広場は30万～40万人の大群集で溢れ返っていた。その中に居た私は、彼らの怒涛のような大歓声と熱気で目も眩まばかりだった。2007年3月6日、サブサハラ・アフリカ最初の独立国、ガーナ共和国は独立50周年を祝っていた。

50年前のガーナは、初代大統領エンクルマのもと、世界一の人造湖による発電所の建設、造船に至る各種製品の製造、道路の建設、農業の拡充、教育の拡充、金融機関の設置など、社会の大開発にばく進し、アフリカの「希望の星」と言われていた。一方、日本もその頃、「もはや戦後ではない」という経済白書が出され、その後の高度経済成長の入口に立っていた。

今年、日本・ガーナの外交樹立50周年でもある。当初の約10年間、両国は共に経済発展に邁進していたが、その後は、日本の幸運と経済発展の続伸とは対照的に、ガーナは悲劇の運命をたどることになる。

繰り返されるガーナの悲劇

米ソ冷戦時代の1966年2月、社会主義者であったエンクルマ大統領は北京訪問を終え、ハノイに出発する直前、一部では米国から何らかの関与があったとする見方もあるクーデターによって倒された。これがガーナの悲劇の始まりとなり、以降92年に第四共和制が成立するまで、クーデターの繰り返しと長期間の軍事政権でガーナには民主的な政治の安定はなかった。その間にエンクルマの始めた大開発プロジェクトは頓挫し、その大きな構造物は残骸を残すのみでガーナ経済は完全に停滞した。82年の国際通貨基金(IMF)の支援を皮切りに、世界銀行や各国の経済援助を受けることになったが、またもやIMF等は、援助の見返りとして高圧的に市場開放、補助金カット等を強要し、これによりガーナ国内の製造業は壊滅し、爪楊枝や果物ジュースに至るまで輸入する輸入経済に陥ってしまった。国内には木材の端切れが山積みされ、腐るほどのオレンジやマンゴーが採れるというのに、いわゆる構造調整プログラムとグローバリズムの到来である。カカオ豆の輸出による外貨は十分でなく、その輸入代金の支払いは外国援助に頼らざるをえない。これではいつまでもたっても援助依存から抜け出せない。歳出の半分近くを援助に依存しているガーナは、国家予算や政策までも外国に牛耳られている。ガーナの歴史を遡れば、常にその時代の先進国に翻弄さ

れてきた。16世紀以来の奴隷化、植民地化、ようやく解放されると冷戦に巻き込まれ、そして今また、先進国のグローバリズムの餌食となっている。

日本とガーナ、50年の関係

日本・ガーナ国交50年の間、当初10年のガーナの躍進時期を除き、日本は経済先進国の一員としてガーナに経済援助をしてきた。医療支援に始まり保健、教育、農業、また最近では地場産業の育成等の支援を行ない、一時は援助額最大であった。日本は一貫してガーナ側に自助努力を求めてきたが、援助依存の体質は変わるべくもなく、かえって、日本もIMF等に追従して構造調整プログラムを強要したのではないかと悔やまれる。日本の援助の中でも特筆すべきは、青年海外協力隊の派遣である。ガーナへの派遣は今年で30年目を迎えた。ガーナ人でも行きたがらない僻地で、日本の青年が現地人と同じ生活をしながら理数科教師等の活動をしていることは、単に技術支援というにとどまらず、ガーナの各地域で広く一般の現地人に勤勉で真面目な日本人を知らしめていることであり、その意義は大きい。

ところで、ガーナのこの1～2年の経済成長はめざましい。今年の独立50周年行事に向け、また来年2008年のアフリカカップ・サッカー大会に向け、首都アクラでは、立派なホテルや大型のコンドミニウムが次々と建設され、幹線・支線道路も補修・拡張され、光ファイバーも敷設された。おそらく、現在のガーナの安定した民主政治、ガーナ人の温厚な性格等が評価され、外国からの投資が進んでいるのであろう。エンクルマ時代以来の開発ブームに沸き立っている。折しも独立50周年を祝うかのように、ガーナ西部の沖合で、近年アフリカで最大級といわれる油田が発見され、数年もすれば商業化されるとのことである。ガーナにとって誠に喜ばしいニュースである。ガーナはその植民地時代の苦い経験から、またアフリカのほかの資源を反面教師として、その油田から得られる富は社会資本の充実やエネルギー源としてアルミニウム等輸出品の製造業の再興に充てることもできる。そうすれば、ガーナ経済は飛躍的に発展し、ガーナ人の生活レベルも格段に上がるだろう。そして何よりも援助依存から脱出することができる。

独立50周年を経て、ガーナは再び蘇ろうとしている。一方、日本は国家財政改革の折から資金的な援助はもはや、ままならない。これからの両国の関係は、援助国と被援助国との関係を終えて、それぞれの歴史、社会、経験から学んだ叢智を共有して、今後の国際社会の中で、共に世界の安定と平和のために尽くすことであろう。

ガーナ文化庁長官との会話が思い出される。「ガーナはかつて植民地であったために、ガーナ人は自分の運命をじっと耐え忍び、万事に受動的で、自分の人生を切り開くなどという積極性がない。また国内に多数の異なる部族・宗教が存在することから、互いに協調性があり、何事にも寛大で、ひいては万事にアバウトになる」。ガーナ人の温厚な性格のゆえんであり、また、なんと日本人の「和の精神」「共存の精神」「協調性の尊重」と似ていることが。

世界の大国が競う国際社会の中にあって、共に領土は小さいが、多様な価値を認め合う「共存の精神」「協調性」をもつ日本人とガーナ人が、共に軍事力でも経済力でもない、第三のソフト・パワーで、地球の両端から「各民族、各宗教、各価値観が共存すること、協調することの大切さ」を世界にアピールすることこそ、両国の任務であろう。民族・宗教間で争っている現在の世界において、こ

れこそが平和への貢献となる。

プロフィール

浅井和子 あさいかずこ

国際基督教大学卒業。1972年弁護士登録、88年直江・浅井法律事務所開設。2000年英国ブラッドフォード大学平和研究大学院修士。02年6月特命全権大使としてガーナに赴任、シエラレオネ、リベリア兼轄。05年4月退任、同年5月浅井法律事務所開設。著書に「八 - バード流交渉術」(共訳)、「民間大使ガーナへ行く」。